秋吉耕佑

[JSB1000チャンピオン]

Kosuke Akiyoshi

秋吉耕佑。だれよりも奇異なライダー人生を送ってきた。A級昇格と共にスズキファクトリー入り。しかしすぐに活躍の場をテストコースに移した。再び観客の前で走り出したのは2005年。全日本JSBにスポット参戦していきなりポールポジション獲得と、鮮烈な再デビューを飾った。その後も開発ライダーの仕事を続け、全日本にフル参戦できたのは2006年と2008年の2回だけ。そしてフル参戦3回目となった2010年。秋吉は全日本チャンピオンの座についた。全日本デビュー以来、15年の歳月が経っていた。

走り続けたいから目標は大きく

「チャンピオンを取ったら、もう一度取りたいっていう気持ちになりました。しかも連続で。嫌がられるくらい取りたい」

その一方で、タイトル獲得はあまり秋吉にとって重要なことではないと言う。

「自分のためだけにやっていると、目標が低くなります。僕は長く乗っていたい。そのためには、目標を小さくしたくない。チャンピオンは僕にとってはどうでもいいんです。目標はチャンピオンよりも勝つこと。本当にタイトルを取りに行ったら、たぶん、攻められないと思うんです。2位でいいよ、3位でもいいよっていう戦いでは、次が見えなくなりますから」

その言葉の証明が、最終戦の第2レースの走りだ。第1レースとはコンディションが変わり、ウエットレースとなった夕刻のレース。秋吉はブッチ切りでトップを独走した。

「雨だからってペースを落とすと、逆に滑ることがある。ウエットレースだから、危ないからペースを下げればいいんじゃないかっていうのは違います。精神的にもトップにいなければだめだし、ある程度、レースを楽しみたいんです。ライダーとしては遅く走るのはいやですからね」

第1レース、第2レース共に優勝で飾ったものの、満点の最終戦ではなかった。

「最終戦の一つ前の岡山では、かゆいところに手が届く以前の問題を抱えていた。最終戦では、かゆいところに手が届かない状態まではいった。難しいですね。タイヤ、マシン、ライダーっていう要素があって、速く走れないときもあります。そういうときにライダーが修正するのか、マシンを直すのか。確かにマシンを昔のセッティングに戻せば、2009年に自分で更新したレコードタイムまでは出せる。けど、そのタイムを超えられない訳です。物足りなかったですね。それ以上に行きたかったけど、そこまでは手が回りませんでした」

2009年、ホンダに電撃移籍したが、スズキでもホンダでも秋吉が求められていたのはタイトルよりも開発能力だった。

「今まで全日本タイトルを取れていませんが、僕は何も変わっていない。考え方も、思いも。今まで取れなかったのは、チーム全員がそっちに向いていなかったからってことですかね。取りたいシチュエーションになかった。チームスタッフ一人一人の目標が違っていたんでしょうね。今回、初めてタイトルを取ってみて分かりました。すべてが回ったときじゃないと取れないものだし、今の高いバランスを保てば取れるものだなって」

目標は自分で決めるもの。

「目標タイムが低ければすぐに達成できる。だからって目標を高く持ちすぎると、そこに到達する前につまづきますよね」

2010年、秋吉は自らホンダに全日本フル参戦を申し入れた。

「MotoGPマシンを開発するにあたって、五感をフル参戦ライダーと同じにしておきたかったし、自分のレーシングスキルや感覚を、いつもレースの感覚にしてテストしたかったんです」

波乱万丈のレース人生

福岡県出身の秋吉のレース人生は、小学生のときに始まった。当時のポケバイ仲間からは、『最初から速かった』と言われる。

しかし秋吉自身は遅かった記憶しかない。しかし成績は『ほとんど優勝』。そのころから目指すところが他人とは違っていたのかもしれない。

高校まではミニバイクに乗り、高校卒業と共に九州選手権でロードレースデビュー。それまで秋吉はホンダにしか乗ったことがなかった。しかし、金銭面で優位なスズキで戦うことになる。

「もちろんホンダに乗りたかったけど、スズキの人に言われたんです。『速いマシンで速く走っても当たり前。遅いマシンで速く走った方が目立つぞ』と。それで、RGV250Γで戦いました」

93年は加藤大治郎に、94年は玉田誠と、ホンダ勢に苦しめられた。そして95年に全日本に昇格すると共にスズキ契約ライダーとなる。

一予定どおりでした。いけるかなって思っていた。でも初めて浜松に行ったときにびっくりしました。僕の頭の中ではワークスマシンは全部社内で造られているのかと思っていたのに、ほとんどのパーツが社外で造られていて、『えっ?! これじゃ俺らと変わらないよ!』って。その部分だけは気持ちが萎えましたね」

その後、全日本GP250クラスを経て、97年にSBクラスにステップアップ。しかし、スポット参戦したSBK SUGO、サイティングラップから猛スピードでストレートに戻ってきた秋吉は、グリッドを撮影していたカメラマンと、運営スタッフに接触してしまう。幸い、二人とも大事には至らなかったが、これをきっかけに、表舞台からは姿を消す。

「(通常、サイティングラップ終了時にはシケインで黄旗が振動しているが)黄旗振動がなかったから行ったんです」

サイティングラップは1周と決まっている訳ではない。状況によっては2周の場合もある。しかし、秋吉は何の言い訳も口にしなかった。

「不幸があった訳じゃないし、2、3年で心の区切りをつけました」

ゼッケン1番をつけて走りたい!

来年は再び全日本に参戦予定だ。

「1番をつけて走りたい。タイトル獲得にはこだわっていなかったけれど、『1』はつけて走りたいですよ」

体が持つまで、目が見えなくなるまで、もういいよって言われるまで、まだまだ走り続けたいという秋吉。2007年にスポット参戦した日本GPでバレンティーノ・ロッシを抜いたときに快感だったと言う秋吉。今は野球選手など他競技のプロたちと共に順天堂大学で研究を行なった『心と体のバランス』を広めようとしている。まだまだこの先も我々を楽しませてくれることは間違いない。